

三・一独立運動のレリーフ（ソウル パゴダ公園）

香川県立三本高等学校 万野年紀

1. 三・一独立運動

日本統治下の1919年3月1日、京城（現・ソウル）のパゴダ公園（現・タプコル公園）に集結した学生が「独立万歳」を叫んでデモを開始した。この後5月頃まで、デモ、ストライキ、あるいは駐在所を襲撃するなど、朝鮮全域で反日独立運動は盛り上がりを見せた。これに対し、日本の朝鮮総督府は武力によって運動を弾圧するが、やがて、統治方法は武断政治から文化政治（懐柔のため武力統制を緩和し民族同化政策をとる）へと転換されることになる。憲兵警察制度の廃止や、集会・言論・出版の一定の範囲での許可などである。広範囲な多数の民衆が参加した運動の成果とみることができる（巧妙な政策転換ともいえる）。

レリーフの中央に描かれる柳寛順（ユ・グァンスン）は、運動に参加し逮捕・起訴され、獄中で死去した梨花学堂学生であり、「朝鮮のジャンヌ・ダルク」と呼ばれている。

その約1か月前の2月8日、第一次世界大戦後の民族自決主義の広まりと期待の中、東京の朝鮮人留学生が独立宣言書を作成した（二・八宣言）。このことを知った朝鮮の宗教指導者たち33名は、来る3月3日に予定されていた国王高宗の葬儀直前の3月1日に、パゴダ公園で独立宣言文を読み上げることを計画する。高宗は反日の行動をとっていたため日本の圧力で退位させられ、悲劇の国王として国民から敬愛されており、葬儀に向けて多くの人々が京城に集まっていた。当日、計画した宗教指導者たちは混乱を避けるとしてそこに現れなかったが、集まっていた学生らによってデモ行進が始まったのである。

2. 近代の朝鮮と日本の関係

鎖国政策を堅持する朝鮮に圧力をかけ開国させたのは日本であった。当時の朝鮮は、国王高宗の

父、大院君と王妃閔妃の対立で混乱しており、そこに宗主国の清、そしてロシアと日本が触手を伸ばしていた。1876年の日朝修好条規締結後、親清派と親日派の抗争のなか、1894年に朝鮮支配をめぐる日清戦争がおこる。そして日本の勝利によって、次はロシアと日本の争いへと移る。1904年に始まった日露戦争中に第1次日韓協約（日本政府派遣顧問の採用）、日露戦争直後に第2次日韓協約（日本政府による外交権掌握）、そしてハーグ密使事件直後の1907年7月には第3次日韓協約（日本政府の内政監督権掌握、韓国軍解散）が締結される。それにともない反日義兵闘争が各地で起こされるが、1910年には韓国併合条約によって植民地化が完成する。しかし、三・一独立運動での大衆運動のエネルギーは、朝鮮総督府による武断政治を文化政治へと転換させることになる。こうした流れについては、「明解新世界史A 新訂版」（以下、教科書）p.133～135、p.162と、「タペストリー*」p.216を参照して展開したい。その後、日本における軍国主義の進展と大陸進出そして国際的孤立化の中で、朝鮮での皇民化政策がさらに推し進められるが、このことについては、教科書p.171、「タペストリー」p.243を参照。

3. 絵画資料を読み解くためのポイント

絵画資料は、授業導入時に興味・関心を引き起こすために活用できる。しかし、資料を用いて考察させたり、内容理解のための使い方も考えられよう。加えて、資料が何を意図して描かれているか留意する必要もある。新学習指導要領世界史Aには「客観的かつ公正な資料に基づいて」、世界史Bには「資料の内容をまとめたり、その意図やねらいを推測したり、資料への疑問を提起したりするなどの活動を通して、資料を多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる」とある。

* 最新世界史図説 タペストリー 七訂版

設問1 レリーフに描かれている事柄を挙げてみよう。また、どのようなことを訴えようとしているのか考えてみよう。

解 答

設問2 三・一独立運動のおこった時点の、朝鮮と日本の関係はどのようであったか。

解 答

設問3 朝鮮や中国に対する日本の姿勢は明治維新以降どのようであったか。

解 答

設問4 このレリーフはいつ、誰が、何のために建てたものか。

解 答

〈別添 解答〉

設問1 (例) 朝鮮民族衣装の女性、柳寛順(ユ・グァンソン)が太極旗を掲げて独立をめざすデモ行進の先頭に立っている。隊列の左方には発砲、右方には刀を振りおろす警備隊が描かれ、デモを鎮圧している。彼女のすぐ右側には父母とおぼしき人物がみえ、隊列の中に倒れている人がいるが、それにもかかわらず彼女の後方には多くの人々が続いている。その決死の姿に緊張感と荘厳さを覚える。弾圧に屈せず胸を張って行進する柳寛順の姿が朝鮮を、デモを鎮圧する警備隊

が日本を象徴している。なお彼女は18歳(17歳の説もある)で獄死した。旗を掲げてデモの先頭に立つ女性ということで、教科書の「はじめに」および「タベストリー」p.194に掲載されている、ドラクロワ「民衆を導く自由の女神」を思い浮かべる生徒もいよう。

設問2 三・一独立運動のおこった1919年の時点では、すでに朝鮮は日本統治下にあり、朝鮮総督府によって統治されていた。

設問3 19世紀におけるヨーロッパ列強のアジア植民地化に対し、いち早く近代化に取り組んだ日本政府が、脱亜入欧の方針に沿って朝鮮・中国への進出を開始する。その主張を福沢諭吉が1885年に新聞の社説「脱亜論」に掲載している(「タベストリー」p.216参照)。また、日清戦争頃から、日本の民衆が朝鮮人・中国人を蔑視する様子を、当時の風刺画や見聞史で見ることができる。

設問4 1967年12月、三・一独立運動発祥の地であるソウル市バゴダ公園に、「三・一精神讃揚碑」等とともに建てられた10枚のレリーフの中の1枚である。当時、韓国は朴大統領政権下で、高度経済成長期にあった日本への挑戦そして国威発揚のため、国民の気持ちをまとめる必要からこうしたレリーフが建てられたと推測される。政府のプロパガンダとしての記念碑という視点も重要である。